

書籍紹介



菊池 誠 松永 和紀
伊勢田 哲治 平川 秀幸 著
飯田 泰之+SYNODOS 編
光文社 刊

『もうダメされない ための「科学」講義』

東日本大震災から一年が過ぎました。地震・津波だけでなく、福島第一原発の事故が国民に衝撃を与え、パニックに陥る人も見られました。事実と異なるデマや、科学的根拠なしに不安を煽る情報が大量に流れ、今に至るまで人々に誤解を与えています。事故によって醸成された科学不信・政府不信のために、正確な情報がそれを必要とする人にうまく伝わらないという事態も起こっています。

それを受け、リスクコミュニケーションやメディアリテラシー、科学的思考について、多くの書籍が刊行されました。本書もその一冊です。震災前に企画された本ですが、科学や社会に造詣の深い論者たちが、震災後の状況も踏まえて科学リテラシーについて論じています。格別の前提知識なしでも読めるように書かれた一般向けの本ですが、知財に関わる者にとっても、自分の仕事の基盤にある「科学」について見つめ直す点で有益と言えます。

本誌の読者には、今回の原発事故等の問題が科学自体の信頼性を損なうものでないこと、科学が用いる方法論の有効性は微塵も揺らいでいないことに同意いただけると思います。ただ、科学を忌避する心情は少なくない人たちの間に共有されています。科学抜きで現代社会の存続は不可能ですが、こういった状況はなぜ生じたのでしょうか。私たちはどう対応していけばよいのでしょうか。以下、各章の概略を、簡単に御紹介したいと思います。

第一章は、長年ニセ科学の批判を続けている物理学者、菊池誠教授の手になる「科学と科学ではないもの」です。「ニセ科学」とは、科学でないのに科学を装って一般の人を騙す言説を指し、「擬似科学」、「似非科学」と呼ばれることもあります。血液型性格診断、『水からの伝言』、ホメオパシー、ゲーム脳などが代表的で、一見もっともらしい内容と、心に訴えかける巧妙な宣伝で信奉者を獲得しています。

この種のニセ科学が問題なのは、単に根拠がないことだけではありません。現実には差別につながったり(血液型)、標準医療の拒否が命に関わる場合もあります(ホメオパシー等の代替医療)。本書の付録には、片瀬久美子氏の「放射性物質をめぐる

あやしい情報と不安に付け込む人たちが」が収録されており、健康を害する可能性のあるニセ科学商品の具体例が紹介されています。マクロビ、EM菌、米のとき汁乳酸菌など、どこかで聞いたことがあるかもしれません。

科学とは、「再現性のある客観的事実」です。メカニズムが未解明なだけでニセ科学と言うものではありません。超伝導のように、現象の確認が先にあって、後から理論的説明が付いてくることがあります。「客観的」というのがポイントで、主観的な経験を短絡的に事実と結びつけるやり方は科学ではありません。上に挙げたようなニセ科学は、どれも客観的な検証を経ていないのです。

第二章「科学の拡大と科学哲学の使い道」は、科学哲学者の伊勢田哲准教授が執筆しています。科学を非科学からどう峻別するかという線引問題に詳しく、2003年の著書『疑似科学と科学の哲学』では、非専門家にも分かりやすくこの問題を掘り下げています。

科学哲学が従来扱ってきたのは、物理や天文学、生物学、化学などの事実解明的な科学です。そのような分野では、発見した現象を共有し、偏見や利害を排除して、研究内容のみを慎重に吟味して評価する態度が必要とされます。ただ、事実の解明よりも応用に比重を置いた科学では、これはそのまま当てはまりません。この種の科学では、「証明不十分でも問題解決につながるから使う」という姿勢が疑似科学と共通してくるので、注意も必要です。一つの線引きとして、「信用できる方法論があるのに、それを使わないようなものが疑似科学」という基準が使えます。代替医療なども、信頼できる検証方法である二重盲検法で有意差が見いだせないのに効果を主張します。創薬などで、伝統的知識の有用性が再発見され、広く利用されることもありますが、取り入れる側の態度が科学的であることが大事でしょう。

第三章は、科学ライター松永和紀氏による「報道はどのように科学をゆがめるのか」。報道というものは注目してもらえなければ意味がありません。そのため、人々に受け入れられやすいよう問題を単純化し、センセーショナルに恐怖を煽る傾向があります。自称も含む「科学者」を登場させ「こういう説もある」と紹介する手法が、この傾向に拍車をかけます。「科学者」が弾きよけになってくれて、報道機関は責任回避できるのです。

エコナ発癌性問題(定量的検証を欠いた議論)、遺伝子組み換え(組み換えナタネとイヌガラシの交雑騒動)などの事例を通じて、警鐘報道がもたらす疑似科学の独り歩きが指摘されています。訂正情報はニュースバリューがなく、メディアは誤報を訂正しないので、科学的に間違った認識が社会に残り続けてしまいます。こういう構造を理解した上で、冷静に物事を考えることが必要です。

第四章では、平川秀幸氏が震災後の科学コミュニケーションのありかたを問います。イギリスでは、BSE騒動の反省(信頼の危機)から科学コミュニケーションにおける大きな方針転換がありました。従来の「理解」重視から「対話」重視への転換です。今後の日本において、科学技術に関する意思決定を、誰がどうやって行なうのが良いのか、適切に議論していくには、こういった例が参考になるでしょう。

紹介者 特許審査第二部エンジン制御 結城 健太郎